

平成 21 年度第 2 回 サイバー・キャンパス・コンソーシアム
電気通信工学系グループ運営委員会 議事概要

I. 日時：平成 21 年 8 月 24 日(月) 午後 4 時 30 分から午後 6 時 30 分まで

II. 場所：私立大学情報教育協会事務局会議室

III. 出席者：越後委員、穴吹委員、岳委員、玉野委員

井端事務局長、森下、恩田

IV. 検討事項

IV. 配布資料：

平成 21 年第 1 回電気通信グループ運営委員会議事録

① の 1, 2 玉野委員素案

② の 1, 2 越後委員案

参考⑥ 分野別の教育課程編成上の参照基準について（基本的な考え方）(案)

補足① 「教育分野」における到達目標の設計

V. 議事概要

1) 委員から資料①の 1, 2 にもとづいて説明があった。

資料①の 1 は、第 1 回会合の議事を司会としてまとめたものであることを補足説明。

資料①の 2 は、宿題であった「当該分野における学士力を測定する方法」について、4 項目を再掲し、それに対する測定法を提言したものであると説明。

具体的な測定法としては、当該分野は、電気主任技術者や通信主任技術者などの資格認定もあり、コアカリキュラムは既に概略形成されていることから、知識内容については、評価項目と到達度を明確にしておきさえすれば、通常の試験で検査できる。実習や学際的な内容については、複数教員による評価法が考えられるのではないかと説明。また、社会ニーズに応える教育に関しては、コースワークの導入も効果的ではないかと説明。複数教員による評価は、実施法において詰めた検討が必要であろうと、補足があった。

2) 委員より資料②の 1, 2 にもとづいて説明があった。

資料②の 1 は、今回の宿題を考えるに当たって、今まで議論してきた内容をもう一度振り返って見る必要があるのではないかと、ということで整理したものである。これを踏まえて、当該分野の学士力 4 項目を細分化してみた結果が、資料②の 1 の 4 頁からの内容である。

今回の宿題にも関わる JABEE との関係において、その精神をもう一度考えて見る必要がある。JABEE は、教育プログラムの認定であるが、今回の学士力の特定とは共通する部分もある。宿題にある測定法について、自校での評価の現状も参考にして検討してみた。その結果の提案内容を資料②の 2 に示す。

自校では、単位認定を教員各自の評価法に任せているが、結果的には「QAA」で示されている評価方法の一部も取り入れた形式で実施されている。すなわち、教授されている内容は、今まで検討してきたコアカリの内容を、ほぼ網羅して、定期試験や小テストで評価が可能であること。将来の技術者として卒業までに身に付けなければならないスキルは、実験、演習、卒業研究で実施されており、複数の教員による評価で実施されている。倫理観については、現状でもキャリア教育で実施しており、また、社会ニーズに応える知識の修得に関しては、インターシップや卒業研究で実施されており、レポートの評価や、加えるなら、複数教員のもとで面談や報告会で評価できる。これらの評価方法は、他の大学でも基本的な方法として実施されていると思われる。

あえて、評価をさらに深める意味で、「共通テスト」に類した方法で評価するとすれば、多数の大学で、試験問題を持ち寄るシステムが考えられるが、煩雑になる恐れもあるのでは、と補足された。

<意見交換>

- ・資料にある「・・・ができる」と書かれている内容は分かりよい。測定法として共通テストのように皆がチカラを合わせる方向は良いことだ。
- ・大きな流れとしては、学術会議の審議状況から観測すると、参考②の「分野別の質保証の枠組みに関する概念図」で見られるように、各専門分野の基本的な理念・哲学に立脚した「大学学士課程」としての教育の在り方をメタレベル的に構築し、それをもとに学生と世界における「チカラ」としての実現を「学士力」構築に向けて、まず図っていく。そして、そのための質保証を各大学がどのように取り組むか、入学者受け入れ方針や教育課程編成方式を、大学毎で定めていく。それにJABEEや共通テスト、国家試験が関わっていく、という方向にあるようだ。
- ・JABEEに関しては、学士力の枠組みの中に部分的には取り入れられるだろう。JABEEはプログラムの認定が表にあるが、裏には学士力の担保がある。
- ・当該分野におけるコアカリに対応する教育内容は、JABEE認定プログラムを云々する以前に、既に学会でかなり煮詰められている。たとえば学会のテキストも広く授業に使われている。学士力の検討においては、本音のところは、参考⑤にある「大学における実践的な技術教育のあり方」で言われているような、「学んでも社会で実践力がない」という産業界からの指摘があるのではないのか。
- ・当該分野での学士力の測定法を考える上で、3の「社会の基盤である電気通信技術の重要性を理解する中で、自然環境や社会環境との関わりを常に認識し、安全、安心に配慮することができる」、また4の「電気通信技術者として、社会のニーズに応える最新技術の動向を把握し、積極的に取り入れ活用できる」ということに関して、学んで社会に出て役立たないと言う点に対しては、どのような取り組みが考えられるだろうか。参考⑤にある「大学における実践的な技術教育のあり方」に見られる「産業界からの、基礎教育の充実と国際的に通用できる実力の育成への意見」では、結局は即実践力への要求と考えられるが、教育の本来のあり方とは異なることではないか、産業界の下部組織化の懸念も考えられる。一方で、教育においても明確なビジョンを打ち出さなければな

らない。

- このように考えていくと、当該分野においては、原点に立って標準になっているカリキュラムの内容をもう一度見直して、測定法を検討する方向で進めていくことでよいのではないか。
- ところで他の分野を見ると、たとえば社会科学分野では「・・・ができなければならない」というような到達目標作りまでにも行き着いていない、足並みが揃っていない現状もある。一方で、補足①の「教育分野」での到達目標の設定に関する資料のように、到達度に対する測定方法を対比させているところもある。この資料は、当該分野での今後の検討にも役立つのではないか。

<種々意見交換後>

- 上述の意見も踏まえて、当該分野においては、補足①の「教育分野」での到達目標の設定に関する資料のように、到達度に対する測定方法を対比させてみることになった。すなわち、資料②の1の4頁からの「当該分野の学士力4項目の細分化」に対する各測定法を検討していく。

この検討内容を、9月18日までの宿題とし、次回、9月26日（土）15時から、甲南大学で開催予定の委員会で検討することを、各委員のスケジュール確認で決定した。